

総会長ご挨拶

第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会 総会長 松下 正
名古屋大学医学部附属病院 輸血部

「第70回輸血・細胞治療学会学術総会へぜひお越し下さい」

第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会の開催がいよいよ迫ってきました。2022年5月27日(金)、28日(土)、29日(日)の3日間にわたり名古屋国際会議場で開催します。2021年の総会に引き続き、金土日の開催となっております。有意義な会になるよう、開催校のみならず、加藤栄史支部長はじめ、学会東海支部の先生方の全面的なバックアップを頂くことができ、とても心強いです。

目玉はたくさんございますが、まずは本学術総会のメインテーマに沿って、シンポジウム「社会にリスペクトされる輸血医療とは」を企画いたしました。社会と国民の健康に対して本学会として何が貢献できるか、原点に返ってメッセージとして会員の皆様に伝われば幸いと考えております。

学術総会は毎回総会長の意向のもとユニークな企画も沢山ありましたが、一方で学術総会が貴重な教育の機会であることを考えますと、今回のだけに限らない一貫性のある企画も必要です(学術委員会規定:「学術集会(学術総会や秋季シンポジウム)の学術性と継続的な教育性を高めることを目的とする」)。まず教育講演は学術委員会で御検討頂いたテーマに沿って、最も適切な演者をお願いすることが出来ました。

また継続的に頂いている国際委員会からのアドバイスのもと、会員の国際性をさらに高める観点から、ISBTの現理事長である Erica M. Wood 先生、次期理事長である Michael P. Busch 先生をお迎えすることができました。この機会を捉え ISBT とのいっそうの連携を図ることができればと考えております。

もちろん、会員の皆様の知的好奇心や探究心を満たせるようなシンポジウム、特別講演などの企画が続々と登場いたします。ぜひ期待下さい。(次頁へ)



どのお弁当がいつ登場するかはお楽しみ

本号の掲載記事

Page 1,2 第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会 総会長ご挨拶

Page 5,6 教育講演5の紹介

Page 3,4 副総会長ご挨拶

Page 7,8 パネルディスカッション〇の紹介

5月末は名古屋名物の猛暑もなく、過ごしやすくなっておりますが、やはりと申しますか、残念なことにパンデミックの勢い未だ衰えず、ハイブリッド開催となってしまいました。急遽行った開催形式変更のため会員の皆様、共催企業の皆様にご迷惑をおかけいたしましたことを深くお詫び申し上げます。このためポスターセッションにおいては、密集した環境を避けるためリモート発表とせざるを得なかったことが誠に残念でなりません。さらに準備プロセスの混乱により抄録集の発送が大幅に遅れてしまいましたこともお詫びしなければなりません。

本当に謝ってばかりでございますが、気を取り直して考えますと、ハイブリッド開催は現地に参加しつつ、リモートで多くの情報を得られるメリットがございます。どうか一人でも多くの皆様に名古屋にお越し頂き、学術総会で多くの知識を学んだ後は、近年全国区となった名古屋メシを本場にてご堪能頂き、参加者お一人お一人に本学術総会が実りあるものとなりますよう、スタッフ全員万全の準備を整えてお迎えする準備を進めております。



有松の町並み



名古屋市科学館



松重閘門



大須



おなじみのなごやめし

直近の10年の学術総会を振り返って

副総会長ご挨拶

第70回日本輸血・細胞治療学会学術総会 副総会長 加藤 栄史
愛知医科大学輸血部・細胞治療センター

今年、開催予定の日本輸血細胞治療学会学術総会は第70回になります。今から10年前、第60回は東日本大地震の翌年で、福島県立医科大学の大戸斉先生が総会長として、被災地であります福島県・郡山市にて開催されました。60回総会は、東日本大地震により中止となった第59回総会のプログラムを反映した内容で復興に向けた意気込みを感じた総会でした。



第61回は稲葉頌一先生(神奈川県赤十字血液センター)が横浜で開催され、認定検査技師のためのリフレッシュコースを企画され盛況な総会でした。第62回は藤村吉博先生(奈良県立医科大学)が奈良で開催され、特別企画として「温故知新」のシンポジウムをもうけ、先人の功績を讃えると共に輸血・細胞治療での領域が進むべき方向性を示した総会でした。第63回は田所憲治先生(日本赤十字血液事業本部中央血液研究所)が東京で開催され、「輸血学の高さと広がり求めて」のテーマで科学的根拠を基にした輸血細胞療法、他職種が係る必要性などに焦点を当てた内容であり、今の輸血細胞療法の基礎を築いた総会でした。

第64回は前川平先生(京都大学)が京都で開催され、「輸血から細胞治療への新展開」とのテーマで細胞治療サイエンス・フォーラムとして11の指定演題を企画し、さらにノーベル医学・生理学賞受賞者の山中伸弥先生の特別招待講演を企画され、充実した内容の総会でした。第65回は浅井隆善先生(千葉県赤十字血液センター)が幕張で開催され、「輸血・細胞治療の新潮流～世界を見据えて～」をテーマで、海外から7名の講演者を招待し、海外の動向を踏まえて今後の輸血・細胞治療が発展する方向性を模索する総会でした。第66回は室井一男先生(自治医科大学)が宇都宮で開催され、「チーム医療とイノベーション」をテーマとし、職種や背景が異なる医療者がチームで適正な輸血・細胞療法を目指した診療への取り組みを発表があり、今後のチーム医療の在り方を示した内容でした。さらに、新しい試みとして、輸血・細胞治療の専門家に直接、対話・相談できる Meet the Expert の企画を生まれ、参加者にとって有意義な総会でした。

第67回は、これまでの関東と関西から離れて熊本にて米村雄士先生(熊本大学)が開催されました。この総会が開催される3年前(2016年)に熊本地震があり、熊本城を含め熊本地域での多大な被害を受けた状態でした。この総会時(2019年)には、街の一部に震災の傷跡があるものの復興が進んでいました。この総会のテーマは、「最良の輸血・細胞治療をめざして:次世代へのメッセージ」とし、本学会が中心となって作成した「科学的根拠に基づく輸血のガイドライン」を輸血医療の現場で実践する医療者に理解、浸透を願った内容の総会でした。また、一般演題は過去最高の340演題であり、盛会な総会でした。



第 68 回総会は、紀野修一先生（日本赤十字社北海道ブロック血液センター）が札幌で開催予定でしたが、2020 年初頭からの新型コロナウイルス感染の急速な拡大と、それにとまなう諸情勢の悪化により、現地での開催を断念され、全面「誌上開催」となりました。この総会のテーマは、「持続可能な輸血医療・細胞治療をめざして一連携のあり方を考える一」とし、少子高齢化社会が進む中で輸血・細胞治療を今後持続的に発展させるために、何が必要で、何をすべきかを検討する内容の総会でした。ただ、その内容は各演者が思いを込めた抄録で報告しています。もう一度、読み直すのも良いものかと思います。

第 69 回総会は、田野崎隆二先生（慶應義塾大学）が東京で開催されました。ただ、新型コロナウイルス感染が依然として蔓延している事から、参加者全員が現地に集まる状況とはならず、東京現地会場とウェブを併用したハイブリッド開催となりました。COVID-19、再生医療、輸血行政の 3 つの特別企画があり、新型コロナウイルス感染が続く現状、今後の輸血・細胞治療について考える内容の総会でした。この様な状況である事からポスターはデジタル化にしてオンデマンドで視聴できるように色々工夫があり、今後の学術総会のあり方を考える上で参考となる総会でもありました。

最後に、直近 10 年を振り返って見て、東日本大地震、熊本地震、そして新型コロナウイルス感染と激動の中、総会長ならびに総会事務局の皆さんが懸命な努力により、学術総会が開催されたと思えました。この様な素晴らしい学術総会に参加できたことに対し、学術総会運営に携わった関係者一同に感謝致します。

教育講演 5

輸血時にベッドサイドで注意すること

山崎 喜子

青森県立中央病院 看護部



私の勤務する青森県立中央病院は青森県唯一の県立総合病院です。第一種感染症指定医療機関、都道府県がん診療連携拠点病院、基幹災害拠点病院、ドクターヘリ運航基地病院などに指定され、全 25 の診療科からなる 684 床の三次救急病院です。2006 年より輸血機能評価 (I&A) 施設に認定され、現在 15 名の学会認定・臨床輸血看護師が、院内の各部署において安全な輸血実践を目指し活動しています。

看護師は直接患者に輸血を施行し、ベッドサイドでケアを提供しており、安全な輸血という点において重要な役割を担っています。また、「輸血チーム医療に関する指針」では、学会認定・臨床輸血看護師には輸血チーム医療で協働できる院内の体制づくりや輸血管理の整備を多職種と連携して行う他、自らが熟練した看護技術を用いて水準の高い看護を実践することや、現場スタッフへの輸血教育の支援を求められています。

患者が輸血を受けることになったとき、看護師は患者が医師からの輸血に関する説明をどの程度理解しているか確認し、必要時は説明を加えながら疑問や不安の軽減に努めます。輸血準備の際には、受領した輸血用血液製剤の外観異常がないことを観察し、オーダーと輸血用血液製剤を医療従事者 2 名で確認し、電子認証システムで照合します。また、それぞれの輸血用血液製剤に適した輸血セットを使用し、正しい方法で取り扱うことが必須です。



厚生労働省が通知している「輸血療法の実施に関する指針」では、患者観察は輸血前、輸血開始 5 分間、開始 15 分後、輸血終了時、輸血後に適宜必要とされています。看護師は輸血前に、患者の血液検査結果やバイタルサインなどのデータ、出血や顔面蒼白など実際に眼に見える症状、倦怠感や眩暈など患者自身が自覚する症状を把握しておきます。輸血開始後は輸血副反応の出現に注意が必要です。輸血用血液製剤の滴下状態や投与経路のトラブルの有無を確認しながら、バイタルサインをモニタリングし、苦痛症状の出現がないかを十分に観察します。

特に急性溶血性副反応は開始後数分で症状が出現し、早急な対処が必要となるため、開始 5 分間は常時ベッドサイドで、さらに開始 15 分後にも全身状態を観察し、早期に異常を発見することが重要です。他にも起こりやすい症状や原因、対処方法を理解しておくことで輸血副反応出現の徴候を早期にとらえることができます。そして速やかで適切な対処をすることで、患者の苦痛を最小限に止め重症化予防できる可能性が高くなります。

教育講演 5

5月28日(土)第2日目 11時00分～11時30分

第3会場(名古屋国際会議場 3号館 3F 国際会議室)

座長:松本 真弓(神鋼記念病院 血液病センター)

演者:山崎 喜子(青森県立中央病院 看護部)

患者の一番傍にいる看護師が安全な輸血を提供するために
注意することや患者観察のポイントについてお話しします

パネルディスカッション 5 臨床工学技士と輸血・細胞治療との関わり

松岡 諒

自治医科大学附属病院 臨床工学部

日本輸血・細胞治療学会は、主に医師、臨床検査技師、看護師の会員より構成されますが、臨床工学技士も僅かながら在籍しています。その多くは、細胞治療におけるアフェレーシスのオペレーターであり、本学会を通して知識と技術の研鑽に励んでいます。

血液成分分離装置を用いて行われるアフェレーシスにおいて、かつては、医師や臨床検査技師による装置オペレーションが多く行われてきましたが、近年は、臨床工学技士もオペレーターを担う施設が増加しています。自治医科大学附属病院においても2011年より、オペレーターが臨床検査技師から臨床工学技士へシフトしていき、多職種がそれぞれの高い専門性を活かして業務にあたっています。



アフェレーシス中の様子

臨床工学技士は、人工呼吸器や人工心肺装置、血液浄化装置などの生命維持管理装置を操作し、また、安全使用のための保守管理を行うことを主な業務とします。医療機器の専門家としてチーム医療の一翼を担い、医師、看護師、臨床検査技師、その他の医療関連職種と協働して、患者の状況に的確に対応した医療提供をサポートしています。なかでも、血液浄化装置を用いておこなう血液浄化療法に従事する臨床工学技士は全体の半数を占め、長きにわたり、血液透析療法や治療的アフェレーシスにおいて、オペレーションや施行中の患者管理、装置のメンテナンス等に携わってきました。治療的アフェレーシスのなかで臨床工学技士は、医師の指示のもと、体外循環によって血液中から血漿成分や細胞成分を分離する技術的支持を行い、治療中における患者のモニタリングおよびトラブル対応にあたっています。

一方、輸血・細胞治療で施行されるアフェレーシスにおいても、分離原理は違えども、体外循環の手技や装置モニタリング、トラブル対応、観察ポイントは治療的アフェレーシスとほぼ変わらないため、血液透析業務に従事する臨床工学技士が輸血・細胞治療を兼務することが多い傾向にあります。

昨年の法改正で、血液成分採血の一連の行為について新たに「臨床検査技師等に関する法律施行規則」に追加されており、細胞採取業務においては、医師から臨床検査技師へのタスクシフトが一層強化されるものと思われます。アフエレーシス操作は、必要十分な量の細胞を安全に採取することが最終目標ですが、リスクを伴う侵襲的手段であるため、目標を達成するには十分なリスクマネジメントが不可欠となります。オペレーターに求められるのは、

- ① 血液成分分離装置の安全かつ的確な操作技術
- ② 効率的で安定した細胞採取
- ③ バイタルサインや症状の観察および対処
- ④ 機器性能を維持するための装置の保守管理・消耗品管理
- ⑤ 患者・ドナー・医師・看護師・医療関係職種等との密なコミュニケーションおよび情報の共有

であり、さまざまなリスクの回避または低減を図るうえで重要な役割を担っています。これらに対し、さまざまな専門家が専門的にマネジメントすることで、安心・安全な医療提供に繋がるものと考えます。臨床工学技士は、装置メンテナンスや操作技術を通して、医師、臨床検査技師、看護師らとともに、安全かつ効果的なアフエレーシス実現の一助となることを目指します。



アフエレーシス担当の臨床工学技士
細胞治療認定管理師の取得を目指しています。

パネルディスカッション 5:「臨床検査技師のタスクシフト/シェア」

5月29日(日) 第3会場 13時10分~14時40分

座長: 牧野 茂義(国家公務員共済組合連合会 虎の門病院輸血部)
奥田 誠 (東邦大学医療センター大森病院輸血部)

「臨床検査技師のタスクシフト/シェア」について、臨床工学技士の立場から、どのように相互連携・協働して良質な医療を目指せばよいか、お話しさせていただきます。

編集後記

新緑の季節、皆様いかがお過ごしでしょうか。e-News 第 19 号をお読みいただき、ありがとうございました。

5 月は、名古屋にて第 70 回日本輸血・細胞治療学会学術総会が開催されます。第 19 号は、学術総会の特集号として総会長である松下正先生、副総会長の加藤栄史先生より、学術総会の魅力についてご紹介して頂きました。その他に、指定演題で登壇する看護師や臨床工学技士の方々にも、発表内容について寄稿して頂きました。

昨今は、オンラインの便利さに慣れてしまい、外出自粛要請もあって、つつい何でも在宅で済ませてしまおうとなりがちですが、現地、名古屋に向かい、face-to-face の直接的な交流と議論、新しい出会いを通して、活気に満ちた学術総会を楽しまれてはいかがでしょうか。（松本 真弓）

一般社団法人日本輸血・細胞治療学会 広報委員会

委員長

加藤 栄史 （愛知医科大学病院）

副委員長

松本 雅則 （奈良県立医科大学附属病院）

委員 (50 音順)

生田 克哉 （北海道赤十字血液センター）

池田 和真 （岡山県赤十字血液センター）

上村 知恵 （慶應義塾大学病院）

岸野 光司 （自治医科大学附属病院）

小見山 貴代美 （豊田厚生病院）

長村 登紀子 （東京大学医科学研究所附属病院）

野崎 昭人 （横浜市立大学附属市民総合医療センター）

日高 陽子 （東邦大学医療センター大森病院）

藤田 浩 （東京都立墨東病院）

松本 真弓 （神鋼記念病院）

山崎 喜子 （青森県立中央病院）

米村 雄士 （熊本県赤十字血液センター）

担当理事

羽藤 高明 （愛媛県赤十字血液センター）